

月詠堂について

月詠堂（つくよみどう／Chapelle Lunette）は、小さなミュージアム（美術館であり、博物館）です。

「ミュージアム」という言葉は、古代ギリシャにおいて芸術や学問を司る女神ムーサたちが集う館である「ムセイオン」を語源としています。古代から現代に至るまで、それは知の殿堂であり、学びの場でした。

同じように、かつて世界各地の寺院や礼拝堂、神社も、単なる追悼の場ではありませんでした。人々はそこに集うことで心を浄化され、感性を研ぎ澄まされました。時間の深い広がりを感じ、過去から未来へと受け継がれてゆく、そこに集い住んできた人々、そして生きてきたものたちの精神（エートス）が、そこで静かに再生されたのです。

月詠堂が展示するのは、なかつくに公園のデザインに関わった芸術家・岡崎乾二郎の作品を中心に、この地に縁ある芸術家たちの仕事、そしてこの地域の環境文化計画から広がり、展開してきた世界的な文化運動の軌跡です。

ここは、完成した作品を並べるだけの場所ではありません。演奏会、講演会などのイベント、ワークショップも行われます。教育、医療と芸術を結びつけ、生涯にわたる学びを支える場所なのです。

世界のすべてに驚き続ける赤ちゃんのような好奇心——その輝きを保ち続ける実践の場、それが月詠堂なのです。

若さだけでなく、老いや心身の変化も、世界の新しさに触れ直す契機になり得ます。心身と環境の関係が変わるとき、私たちは世界を受け取り直し、感じ直していきます。学び（そして、たとえばリハビリテーション）とは、その力を育てる営みでもあります。

芸術はまた、医療や学び、そして環境の再生力をも結びつける希望にもなり得ます。月詠堂は、そう信じています。

月詠堂の建物

はじめに

広島県庄原市総領町稻草に位置するなかつくに公園は、灰塚ダム建設により生まれた広大な緑地です。このダムは、江の川の上流に位置し、洪水調整や用水を目的として2007年に完成しました。建設に伴い、豊かな水田風景が失われ、一帯は法規的には「貯水（遊水）池」とされる空白の場所に還元されました。しかし、地元住民の声とアーティスト・岡崎乾二郎を中心としたワークショップを通じて、この空白の場所は「なかつくに公園」として再生されました。公園の総面積は約125,000㎡で、途絶えることのない親水自然空間、大地自然による景観芸術が特徴です。この場所の性格（トポス）は、水が与える、喪失と新生の二面性を体現しています。背後の山々から集まる溪流がお米池を通じて田に配水される自然の循環が、ダムによる人工的な介入と対比され、神話的に水を生命の源泉でありながら、洪水や水没という負の出来事の予知と備えを背負っています。けれど、そもそもこのエリアには、こうした洪水や災害と再生、新生を包含した自然の長大な時間の循環を包みこむスケールの、集落や神社群の配置があり、その長い記憶を宿す場所として生きてきた場所だったのです。

1

月詠堂は、この公園の東端部（田総の里に接する位置）に、計画されている小さな美術館です。

月詠堂は、月神ツクヨミにちなみ、芸術を通じて光と影、昇華と新生を探求する場です。ツクヨミは日本神話で、イザナギの右目から生まれた神として知られ、アマテラス（太陽）とスサノオ（嵐）の兄妹で、夜と月の神です。建物の形は半円形のドーム（ボールド）＝かまぼこ型で、月神ツクヨミの月その形を表しています。ゆえに月詠堂の別名はチャペル・ルネット Chapelle Lunette

（lunetteは半月形の窓を意味する建築用語）と名付けられてもいます。

月の満ち欠け（潮の満ち引き）は時間の循環を示すだけではありません。その循環の中に一瞬、自然の景観、月や太陽の推移、四季、自然界のさまざまなものがひらめくように現れる、その形象、景観。その一刻を発見し経験する、目の歓びを教えてくれるものでもあります。月詠堂は、月の美しさを愛で、詠むように、芸術作品と向き合う時間を与えてくれる美術館＝堂となります。

神社と自然のつながり

公園内には、古くから信仰を集める意賀美神社（いがみ神社）と表底神社が鎮座しています。意賀美神社は、平安時代以前から祀られる古社で、延喜式神名帳に記された式内社論社です。高竈神（たかおかみのかみ）を主祭神とし、高竈神は恵みの雨をもたらす神として、雨乞いや雨止めの祈願、農業の豊作守護にご利益があると信仰されています。意賀美神社は古来から水害除けや航行安全の神として崇められ、境内には御神水や梅林があり、心身の浄化（禊）を象徴します。龍神としての性質から、水の循環や自然の恵みを体現し、里山や河川周辺的环境と結びついた神話的役割を果たしています。

灰塚ダム建設時、多くの周辺神社が水没や移転の対象となり、意賀美神社に合祀されました。一方、表底神社は当初合祀を免れましたが、氏子の減少と高齢化により、意賀美神社の旧境内に移転しました。表底神社の祭神は住吉三神（底筒男命・中筒男命・表筒男命）で、同じく海や航海の守護神として知られ、山中の立地は極めて珍しいものですが、記紀神話でイザナギの禊から生まれた浄化の神々であるため、水の象徴としてここに適応しています。元の場所は意賀美神社と間の溪流上流200mの滝で、「神入谷（しにゅうだに）」と呼ばれる谷にありました。この谷名は、神々が「入る」聖域を暗示し、水の流れが神聖なつながりを象徴します。現在も、この滝の水は意賀美神社と表底神社の間にある小川となって流れています。

以上の配置は、「なかつくに（中つ国）」という公園名とも響き合い、日本神話における中間世界（現世）を表すものとも読めます。

神話的・意味的ネットワークの場所の読み解き。 このレイアウトは、神話的なネットワークを構築しています。

4-1.

水の循環と対比 お米池は、山の溪流を集め、公園の田に水を配る生命の源です。 お米池の中心の島には、桂の木が植えられます。桂の木は、貴船神社の神木として知られ、中国の神話では月に生える不死の木として語られるなど、浄化と月の象徴をあわせ持つ樹木です。対して、表底神社は海の神々を祀り、浄化と航海を象徴しつつ、山中において水の「底」と「表」を体現します。住吉三神は海の深層（底・中・表）を司る神であり、溪流の滝（神入谷）とダム、湖の双方を連想させます。意賀美神社の高麗神は雨を操り、水の動的な側面を担います。これらがつながることで、水の「上流（山・雨）→ 中流（溪流・浄化）→ 下流（池・灌漑）」という循環のサイクルが、より豊かな意味をともなって立ち上がります。

4-2

月詠堂、三日月舞台、月の象徴するもの。 月詠堂は、月神ツクヨミにその名を取ります。意賀美神社が担う「水による禊（みそぎ）のはたらき」と月詠の神格とは、記紀神話に一貫して流れる——水の浄化という主題によって、深く響き合っています。月詠命は、イザナギ命が黄泉より帰還したのち、穢れを祓うため禊を行い、ことに右目を洗い清めたその段に生まれた神です。（ツクヨミは日本神話で、イザナギの右目から生まれた神として知られ、アマテラス（太陽）やスサノオ（嵐）ときょうだい神をなす、夜と月の神です）。

さらに同じ禊の次第のなかで、潮水に身をすすぐ折々、すなわち**底・中・上（表）**という段階に応じて次々生まれたと語られるのが、いわゆる住吉三神（筒之男三神）であり、この三神のいずれもイザナギ命を親として同じ起源を分かちあう神々——いわば、きょうだい神にほかなりません。

そしてツクヨミの月は、潮の満ち引き——すなわち水の循環——と切り結ぶ象徴でもあります。水が穢れを祓い、月がその水の周期を照らし導くとき、禊の物語は単なる清めの作法にとどまらず、世界のリズムそのものを語る神話として立ち上がってくるのです。

月詠堂はこうした世界のリズムを体感し、その悠久の時に浸る場所ということになるでしょう。一方でお米池に浮かんだ満月のような形の島と半月状の月詠堂のあいだに位置する三日月舞台は、新月から満月へ向かう途中に現れる三日月の始まりを象徴し、パフォーマンスの場として、月の満ち欠けや季節の巡りを、身体表現や儀式を通じて時間芸術として再現する場となるでしょう。

4-3 場所のダイナミズム。

意賀美（雨・龍）→表底（海・浄化）→お米池（生命・農業）→三日月舞台（再生・儀式）→月詠堂（芸術・超越）のネットワークが、ダムによる水没一土への還元＝記憶への沈潜、水をえた浮上、再生、という新生を織りなします。このネットワークは、地域の記憶を神話的に再構築し、失われた水田をお米池を通じて象徴的に復活させ、水神たちの守護を継続します。 意賀美（雨・龍）→表底（海・浄化）→お米池と水面の月（生命・農業）→三日月舞台（再生・儀式）→月詠堂（芸術・超越）という流れは、ダムによる水没＝土への還元＝記憶への沈）から、水を得た浮上・再生へと至る新生のプロセスを織りなします。 このネットワークは、灰塚ダムの影響を受けた地域の記憶を神話的に再構築し、失われた水田をお米池を通じて象徴的に復活させるとともに、水神たちの守護を、現代の風景の中で静かに継続させます。

5 月詠堂の役割と未来

月詠堂は、こうして 稲草の地＝なかつくに公園 にもともと先在していた神話的ネットワークを浮上させ再編し、ここにあった場所としての力を解き放ち、新生させる、ひとつの鍵として働くでしょう。その役割は宗教的・芸術的な空間を総合した、本当の意味での環境世界の礎石の一つになることです。